

# 水ける生

聖霊による刷新のために

## 祈りと喜びの集いーフランク・マッケイ神父様と共にー

熊本県・八代教会 Y・S

令和五年八月二八日(月)に人吉教会で「祈りの集い」が行われました。東京・横浜・和歌山・京都・広島など本州からも多くの方が駆けつけて下さり、素晴らしい祈りの集いになりました。マッケイ神父様がみんなの祈りを強くご希望されたからです。脳腫瘍の手術後の一時退院時に行われた「(コロナ禍の5類移行前であったため九州の方限定)五月六日の祈りの集い」でも、三人の八代の信者が、ジョー神父様、末吉神父様、オカロール神父様がマッケイ神父様に按手の祈りをされておられる時に、きれいなグラデーシヨンの光を見えています。

マッケイ神父様は、聖週間の始まった四月三日に脳腫瘍が判明し、月末に約5センチ大の脳腫瘍の摘出手術を受けられました。手術に付き添われたオカロール神父様に「悪性であること。また、余命は、未治療であれば一か月、治療しても平均余命は一年半」と告げられました。脳腫瘍の中でも「膠芽腫(脳腫瘍の中でも最も悪性度が高い。ステージ4)」という二週間で倍増するものもある増殖力が速いタイプの癌です。私は、「癒しの集い(人吉教会で月一回開

催)」で、各々の信者に按手が行われた或る時、「何かが流れる」の感じました。各人、違う量なのです。「これは、一体何だろう?」と不思議に思いながら、最後にマッケイ神父様に按手した瞬間、「うわーナイヤガラの滝だ」と思いました。毎週典礼に与る人でも「壁」があり、一滴も流れない人もいれば、時々教会に来る人で蛇口から糸の細さで水が流れる人もいました。その時、洗礼前の人で蛇口を軽くひねったくらいの水の量が出ていた人もいました。この「水」の答えは、今回の集いでのマッケイ神父様のミサ説教の中になりました。

マッケイ神父様は、まだご自分の使命が終わっていないことを強く自覚されておられます。そして、今後3冊の本を出版したいと思っておられます。その中の1冊は「癒し」をテーマにした本です。脳腫瘍の手術を受けられる前、「もし、私の腫瘍が悪性であれば、これは素晴らしい福音宣教になる」と、思われていました。その癒しを通して人々に「神の愛」を伝え、最後まで福音宣教者としての使命を果たすおつもりです。

### ☆ 目 次 ☆

祈りと喜びの集い開かれるー熊本・人吉教会から	1
「私のミッション」(フランク・マッケイ神父)	4
沖縄からこんにちは(マイケル・ヴィン神父)	5
聖霊の導きのままにー北海道の一隅での動き (久保伊都子)	7
東京・初台の祈りの集い再開される(井之上靖子)	9
ある翻訳者の告白(小熊晴代)	10

### 発行

聖霊による刷新

全国委員会

編集委員

中村友太郎  
益田 薫

購読料(送料込み・年1600円)

購読申込み・振込み先

〒141-0021  
東京都品川区上大崎2丁目  
10-34-2-312

聖霊による刷新全国委員会

Email: ikerumizu.livingwater@gmail.com

郵便振替 00190-1-18878

口座名 聖霊による刷新全国委員会

祈りの集いから一週間後、九月四日に熊本大病院で診察が行われました。八月の診察時、MRI検査で約1センチの円として白く映っていたものは「もしかすると、腫瘍ではなくて手

術痕の可能性もあります。もし、手術痕ならば大きさは変化しないが、腫瘍ならば大きさが変わります」と言われていました。さて、今回のMRI検査の結果、主治医は1センチの白い画像を

指しながら「腫瘍の中央が消えて、全体が退縮して（ドーナツ状になって）います。非常に経過は順調です」と言われました。また、「脳全体に隙間が無い状態であった）前回の画像とは違

い、今回の画像は（脳幹・右脳・左脳の間）隙間ができていますので、脳全体の浮腫が取れているということ。非常に経過は順調です」とのことでした。：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

## 八月二十八日のミサ説教

### マタイによる福音書25章・タラントンのたとえ



皆さん、今日は来てくださって本当に有難うございます。この今日の集いは、神様の栄光のためです。皆さんを通して、私を通して、神様が自由に働かれるように。第一朗読でこう聞きました。「神に愛されている兄弟たち、あなた方が神から選ばれていることを私は知っています。私たちの福音があなた方に伝えられたのは、ただ言葉だけによらず、力と聖霊と強い確信とによったからです」（一テサロニケ1・4-5）。

皆さん、ここでは、自分の才能や賜物などについて語っていません。神様が「私たちに与えられた賜物や才能を通して働くことができるように」です。私たちが神様から頂いた才能や賜物は、水路のようです。神様は、「生きた水」。この「生きた水」は、私たちの水路を通して流れて行くはず。もし、私たちがその賜物を使わないならば、その水路は閉ざされています。その結果、自分を傷つけることになり。それは、救いの神と同じです。神様は私たちが赦されたいのです。もし、私たちが赦さないならば、神様は私たちが赦すことができませぬ。

今日の福音では、ある人が主人から5タラントン、ある人は2タラントン、ある人は1タラントン預かりました。そして、5タラントン預かった人は5タラントン、2タラントン預かった人は2タラントン儲けました。つまり、二人とも100%儲けました。聖書の中で主人はこう言いました。「主人と一緒に喜んでくれ」（マタイ25・21）と。つまり、二人とも報いは同じで

す。もし、1タラントン預かった人が1タラントンだけ儲けたら、彼も100%の報いを受けたでしょう。しかし、1タラントン預かった人はタラントンを使いませんでした。

私たちがタラントンを持っている人々を観る時、「あの人はすごい賜物を持っている。すごい、すごい」と言う必要はありません。なぜなら、みんなそれぞれ自分がもらった賜物によって働くはずだからです。神様から5タラントンもらった人は5タラントン儲けるはずで、ですから、自分の賜物と他の人の賜物を比べる必要はありません。たとえば、自分が役に立たないと思っていた子供（ヨハネ6・9）が、イエス様に五個のパンと魚を渡さなかったら、すごい奇跡は起こらなかったでしょう。私たちは、時々、「何も無い、何も無い」と思っていますが、自分のタラントンを誠実に使えば、イエスは奇跡を起こすことができます。

別のたとえがあります。それは、ムナのたとえ話です。そのたとえによると、主人は十人に1ムナづつ与えました。ある人は10ムナを、ある人は5ムナを儲けました。つまり、もしみんな1ムナだけ持っている人が1ムナだけ儲けたら、100%の報いももらいます。10ムナ儲けた人は100%、5ムナ儲けた人は50%儲けました。そして、報いはそれによって違いました（ルカ19・17-19）。天国でも同じようなことです。私たちは、少なくとも天国で100%もらえるはずで、す。もし、神様が私たちを通して自由に働くことを許せば、だんだんもつともつと報いももらえます。天国ではもつと報いももらうことができます。神様に応えれば応えるほど、もつと貰うことができます。それが、「私たちの召し出し」です。

ところでタラントンのたとえの中で、少し分かりにくいところがあるでしょう。1タラントンを使わなかった人に対して、主人はこう言いました。「怠け者の悪い僕だ。・・そのタラントンを少なくても銀行に入れておくべきであった。利息付きで返してもらうために」というところ。これは、信者の最低限度の報いのことです。もし、信者が「神様に従いたいから、罪を犯しません」と言えば、天国に入った場合、天国で1%くらい報いを貰うかもしれませんが、1タラントンを預かった人は、それもしなかったもので、全てを失いました。

幼きイエスの聖テレジアは、こう言いました。「この世にいる間、私たちはコップを作りまゐる人は大きなコップ、ある人は小さいコップを。私たちが天国に到着したら、神様はそのコップをご自分の幸せで満たされます。みんなが、100%幸せです。なぜなら、それ以上入ることができないからです。しかし、その報いは、それぞれの人が儲けた%によって違います。」

この世にいる間、私たちが心を30%開けば、天国に到着した時、神様は30%与えることができます。私たちが50%心を開けば、50%神様からもらうことができます。私たちは、この世にいる間、自分自身で天国での身分や立場や状態を決めるのです。私たちがこの世にいる間、自身で天国での身分や立場や状態を決めるのです。私たちがこの世にいる間、「主よ、今日出会う人々のためにあなたの言葉をください。して欲しいことを教えてください。そして、それを実践できるように助けてください。私は自分の望みの通りではなく、あなたの望みの通りに生きたいです」と祈ります。そうすれば、神様は自由に働くことができます。そして、だんだん神様のようになることができます。それが、私たちの『召し出し』です。ですから、タラントンは水路です。才能も賜物も水路です。聖パウロが言った「不思議な賜物」も頼みましようか。これは、自分のためではありません。神様と人々を愛すれば愛するほど賜物が欲しくてたまらなくなりません。「神様が自分を

通して自由に働けるように」と。  
これが私たちの毎日の祈りとなるはずです。「神様、私はあなたの道具です。あなたが、私を通して自由に働けるように、全部の恵みをお与えください。妨げを全て取り除いてください。私はあなたのものです。そのた

めにあなたは世界を作る前に私を選ばれました」と。  
私たちは、今日もそのために祈っています。「私の癒しのためだけではなく、そのために祈ります。教会の癒しのためにも。」  
もうすぐ、いえ、既に教会は

## 私のミッション

### フランク・マッケイ神父

オーストラリアのシドニーにある聖コロンバン会の神学校で6年目に入った頃、同期生たちと私は、司祭叙階後どこで働きたいかと聞かれました。それまで聖コロンバン会の神学生にそのような質問はされませんでした。むしろ、新司祭は最も必要とされている国に遣わされるのが通例だったのです。そこで私は初めて、神がどこに行くことを望んでおられるのかを考え祈り始めました。すると、すぐに神様からの返事を感じました。

日本について何も知りませんでした。私の性格や精神は日本のそれと似ていると感じました。だから、日本に行きたいと申し出ました。もし、希望した場所が無理なら、他の国に送られることは分かっていました。日本については、当時の聖コロンバン会では15年間オーストラリアから日本へ宣教師を派遣していませんでしたが、私は「必ず日本に行く」と深く感じていました。数カ月後、私と同期生1名が日本に赴任することになったと知らされました。翌年5月に私たちは司祭に叙階され、12月

分裂しています。ある教会では、信者同士で戦っています。本当にひどい状態です。しかし、それが起こることを、神様は既に昔から教えてくださっています。今の苦しみは、誕生の苦しみです。その苦しみの時代がもう始

まろうとしています。その後、これまで世の初めから無かった程の素晴らしい時代が始まります。ですから、今日、このミサを自分の為だけでなく、教会の為に捧げましょう。マリア様とイエス様の取り次ぎを通して。

題はすべて神の問題であることを学びました。

時には、他の人と同じように、苦しみの時もありますが、いつもイエスの喜びを体験しています。私にとって苦しみは神からの贈り物です。この贈り物のおかげで私たちは神に信頼して全てを委ね、より早く成長することができるとが出来ます。苦しみを通して、神は他の人々を救うことがおできになるのです。この神祕を理解し受け入れることは、神の恵みの一つです。私はさまざまなきしみを経験したので、同じ苦しみを持つ人々を助けることができます。聖パウロは、苦しみの目的の一つをこう説明しました。「神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださ

るので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます」(二コリント1・4)。

私は日本に来る数ヶ月前に、「聖霊による洗礼」という祈り

を通して神の深い愛に浸されるという素晴らしい体験をしました。それ以来、他の人々も同じように神の愛を体験するのを助けることによって私は祝福を受けています。神が望まれる場所に私がいられる恵みをください

るよう私はいつも神に願っています。そして、もし神の御心であれば、私が神のみもとに召されて御顔を仰ぎ見る日まで私のミッション「使命・宣教地」がここ日本にあるように祈っています。

## 沖縄からこんにちは

名護教会

マイケル・グエン・スアン・ヴェイン神父



実感しています。なお、聖霊による刷新にあつては、全国コムニオ奉仕会の沖縄地区代表も務めさせていただいております。

沖縄に来て以来、日本語はまだまだですけど、わずかな期間で刷新の集いの中で、日

聖コロンバン会のフランク・マツケイ師は日本に在住し、今も活動しておられます。在日宣教五十周年にあたる上掲の記事は『コロンバン・ミッション・マガジン』二〇二三年三・四月号に掲載されたものです。

らは聖霊によるたくさんさんの経験のほんの一部ですね。

さて、この私が目下、その邦訳出版を目指している小さな本すなわち、『聖霊―永遠から永遠へと向かう無尽蔵の芸術家』を、ぜひ全国の皆様にご紹介したいと思います。私は本書をフイリピンでの研修期間中の二〇〇八年に書き始めましたが、二〇二一年から再読して書き加えるもしています。また、母国語であるベトナム語による刊行も考えています。

私はベトナム出身のマイケル・ヴェインと申します。二〇〇三年から二〇一〇年まで、フイリピンでの「良き牧者キリスト」大神学校と神言会神学院、またローマの教皇庁立ウルバノ大学院付属神学校で司祭養成を受け、そこでの勉学を経て卒業いたしました。そして二〇一〇年十二月十四日・十字架の聖ヨハネの祝日に司祭叙階されました。その後、二〇一一年より今まで、那覇教区の司祭として小教区で働いております。

いろいろな教会での司牧的な体験・経験があり得ますが、と

りわけ、日々聖霊様に動かされるのが感じられます。司祭として、神様にも教会や人々にも奉仕することを通じて、いつも聖霊様の働き・促しを受け取り、主の愛に生かされていることを

本語でのとりなしの祈りもスムーズに出来上ってきましたし、司牧的活動の中でも、聖霊に導かれてお話しし、人々を導いてきました。また、癒しの賜物や人の上に按手しての祈りで人々を癒す体験もしています。これ

いずれにしても、副題に見られる「芸術家のイメージ」で捉える聖霊の観方は、大切だと思われまます。私にとって、自分の人生はシンフォニーですね。私は音楽が大好きですし、芸術に

関する仕事もやっています。だから、その関わりの中には、聖霊様が一番最高で無尽蔵の芸術家だと、ずっと信じています。

小著ではあっても、七章からなる本書は、「三位一体論」「創造論」「恩恵論」「キリスト論」「マリア論」「典礼・秘跡論」「終末論」との関わりで、広く全面的な聖霊論を屈指しています。それというのも、聖霊様は聖書や典礼や祈りや全面的な信仰生活等を通して私たちと共にいらっしゃるし、私たちにイエス様の教えをたえず思い浮かべて理解するように、ご説明下さり、導いて下さるからです。私たちは日々どのように祈るのか分からず、戸惑っていたりしますが、聖霊様が私たちに代わって神様にお祈り下さいます。そしてまた、秘跡や典礼を受ける度に、聖霊様のお蔭で、清い心で相応しく受け取れるようにしてくださるのです。教会を築くことも、カリスマと種々の奉仕も聖霊様によって与えられます。さらにまた、使徒的・宣教

的な生活の様々な召命の芽生えも、その使命を果たし尽くすことも同じ神の愛である聖霊様によることは、言うまでもないことでしょう。

それにしても、私がこのような短い紹介を通して、聖霊様の導きや働きなどについての経験や皆さまに書き尽くすことは、到底できないと思います。ですから、私の小冊子の邦訳がいつか刊行されたときには、ぜひぜひ目を通して下さるよう、今から宜しくお願い申し上げます。

終わりに、聖アウグスティノ作とされている『聖霊に向かう祈り』を、皆様に分かち合わせさせていただきます。

「聖霊、私の内に息づいてください、私の思いがすべて聖なるものであるように。」

聖霊、私の内に御業を行ってください、私の働きも聖なるものであるように。

聖霊、私の心を引き寄せてく

ださい、私が聖なるものだけを愛するように。

聖霊、私を強めてください、私が聖なるものをすべて守り抜くために。

聖霊、私を見守ってください、私がいつも聖なる者であるように、アーメン」

マイケル・ヴィン神父様の著作『聖霊論』の結びには、聖霊との親しさが溢れていますので、その一端を紹介させていただきます。（編集担当）

「聖霊の体験は、私の存在も

しくは実存の最も内なる核心から始まります。それは、何らかの対象との出会いやそのような出来事の結果を意味するのではなく、内在される聖霊に私が〈触れたり〉（触れられたり）できるということです。そして、神からの恵みとして人間に授けられる聖霊は、神が生成なさる世界を鼓舞し、また、人間性の中で成就されようとする静止することのない衝動を、人々のう

ちに掻き立てます。イエス・キリストが友人として容易に認められるのと比べると、神秘的な賜物としての聖霊は、一見したところ、理解しがたく思われませんが、その聖霊の働きは、多くの人々の生活のうちにキリストを継続的に現存させることにあります。聖霊を知るだけではありません。十分であって、私は聖霊を、人生と魂の導き手であり、信頼できる内なる教師であると受け止めています。

聖霊はまさに、父なる神の偉大な、ユニークで測り知れない、無償の贈り物であり、教会を通して、注がれる物体に応じて異なる色彩を誘発する光のように、実に多くの賜物やカリスマによって与えられています。それゆえに、さまざまな賜物はどこでも聞こえる一つの音楽のようなものですが、それをどのように受け止めて養い成長させるかは私の役割です。もともと一つの賜物がたくさんある賜物に分かれています。教会の一致を築くためであり、そのためにこそ、

全ての賜物が与えられているのです。聖霊を受けなければ、私は何もすることが出来ないでしょう。聖霊の現存を意識してい

ない人は、ちょうどガスやオイルの欠けている機械のようなものです。」

## 聖霊の導きのままに

### ―北海道の一隅での動き―

北海道・名寄教会 久保伊都子

私たちが「子育てサロンマナ」を始めることができたのは聖霊の導きによるものでした。東京から故郷の北海道に戻って今年で三年目になります。帰道した当初、母の介護もありましたが「これからは仕事もせず、のんびり暮らして行こう。」と内心考えていたのです。半面「神様、どうぞ私を御心のままにお使ください。主の御旨が行われますように。」と日々の祈りの中で唱えている自分がいました。

今から六年前になりますが、東京に住んでいた頃に友人夫婦のお姉さまが亡くなられ、趣味で収集されていた沢山の食器が残されました。ご夫婦の会話の

中で「だれかもらってくれる人はいないかしら？」と処分を思案されていたのを耳にしました。そのティセツトはイギリスの有名なブランドの小花模様がとてもかわいい、私が大好きなものでした。高尚な物でしたので、私が「欲しい」というのはあまりにも凶々しいと気が引けていたのですが、自分の意に反して「いただきます」と声が勝手に出てしまいました。瞬間、自分でも驚いて恥ずかしくなってしまうことを今もはっきり覚えています。そして友人たちはしばらくしたら大量のティセツトを我が家まで運んでくださいました。残念なことにティセツトは東京の狭いマンションでは日

の目を見ることがなく、引き出しの奥底でじっと眠っていました。それらの食器は私が北海道の広い実家に戻ったことでもうやく表舞台に出て大活躍できるようにになりました。

幼馴染の友人達、絵本の読み聞かせ会の仲間たち、教会の信者の仲間たちとお茶を飲みながら大いに語り合う役割の一旦を担ってくれたのです。そして毎回参加されていた三人の信者の方々に声をかけて、昨年の九月に月一回祈りの集いを始めることになりました。ロザリオの祈り、讚美の歌を歌い、聖書朗読とその分かち合い。その後はそれぞれに持ち寄ったご馳走を美味しくいただきましたがらの信仰の分かち合い、数々のおしゃべり。先月は初めて皆の日程が合わず集いを行うことができなかったのですが、「とても寂しかった、残念だった。」という声もあり、いつの間にか私達一人一人にとって集いはなくてはならないような存在になっていたことに気

づかされました。

集いが始まって十か月後の今年の六月のことです。所属している名寄教会はミサ後、信徒達の交流のため伝道室でお茶とお菓子が出されます。ある日、同じ祈りの集いのメンバーで助産師の友人とお茶を飲みながらおしゃべりしていたら、信徒会長が「教会の二階の和室が空いているけど、何かに使えないだろうか？」と私たちに声をかけてきました。二人が同時に頭に浮かんだのは子育てサロンでした。自衛隊の町でもあり、住民の50%が他からの転入者という土地柄であることから、孤独で子育てをされている若いお母さま達の存在は祈りの集いでも度々話題に上っていました。その結果集いのメンバー全員で、今年8月21日から0〜3歳までの子供と保護者の為の「子育てサロンマナ」を週一で始めることになったのです。場所は確保でき、参加費無料と決めたものの、その時点での資金はゼロでした。私たちは労働だけを提供し、あ



とは祈りにより神様からすべてをいただくように話していました。これは主のご計画であって、私たちはそのお手伝いをしているだけであること。そして神様がどのような方法で私たちの祈りを聞き入れて下さるかをワクワクしながら待つことにしました。

和室の畳が古くなっていくので、カーペットを購入することになり折っていましたら、私達が考えていた以上の座り心地の良い高級カーペットが匿名希望で届きました。教会の信者による募金、その後も地元の新聞社3社からの取材があり、新聞に掲載されたこともあり、寄付とそして市からも補助金をいただき、予想を上回る十分な資金が集まったのです。その上、条例がないということでしたが、サロンのことを市の広報ラインに載せてくれることになりました。

毎週月曜日10時から11時半まで。メンバーはライフワークに近隣の幼稚園、小、中、高、大学だけではなく、札幌まで講



以前よりも聖霊の一致と喜びを強く感じさせられたのは、参加される皆さんそれぞれの溢れるばかりの感想でした。

そして九月十四日の十字架称賛の祝日には、ジラール神父様の司式でミサを捧げていただきました。

これからも、聖霊に導かれて、神様の祝福のうちに、聖母マリ

アとすべての天使たちと共に賛美を続けていきますように祈っています。

毎週木曜日午後一時から三時までの集まりです。皆さんどうぞ何時でもいらしてください。

初台の集い一同を代表して

井之上靖子

## ある翻訳者の告白

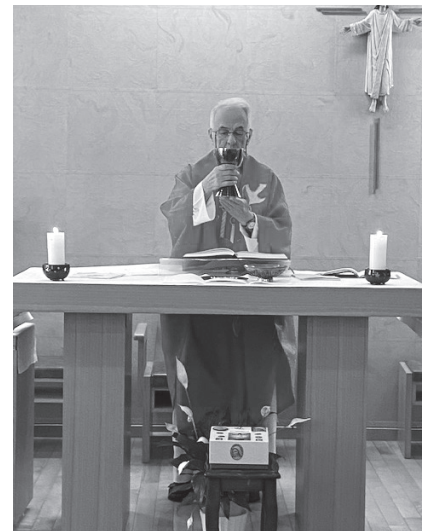
全国コムニオ奉仕会コーディネーター 小熊晴代

### 言語は美しい響き

最近、私の所属する小教区教会では、主日のミサの閉祭の後にベトナム語で『アヴェ・マリアの祈り』を会衆全員で捧げるようになりました。ベトナム人の信者さんの先唱に合わせて少しずつ祈っていきます。日本人やフィリピン人などベトナム語を知らない私たちはプリントとにらめっこしながらカタカナ表記を参考にしますが、母音数が5個と少なくアクセントも音の高低のみの日本語と違い、12種類の母音を持つ声調言語である

ベトナム語の発音はかなりのチャレンジです。口腔内で舌はどんな複雑な動きをしているのだろうかと思いつつ、その特性ゆえに話声でも歌声のように聞こえ、耳には快い響きです。音だけ聞いて意味が分かる単語は「マリア」だけですが、どんな言語であれ、呪いやののしりの言葉はよんだ響きに聞こえ、神の母であり私たちの母であるマリア様を通して神に捧げる祝福と賛美と感謝の言葉は澄み切った響きに聞こえるようです。

私が日本語以外の他言語の存



テレビ中継を観ました。同時通訳という職業があることを初めて知りました。中学校に入る頃には洋楽を聞くようになり、文字通り「音楽」の音の響きを楽しむと同時に何を歌っているのか知りたくて英語の学習にも熱が入るようになりました。

### 出会いは英語の定冠詞

大学の英文学科に入学して二年目、必修科目の英語の授業では頻繁に英作文の宿題が出され、赤ペンでビッシリ添削されて返却されました。担当のアメリカ人教授の手書きのコメントは、私たちの世代がまだ中学で習っていた筆記体のお手本とは違っ

て高さがなく、しかも傾斜も右肩上がりではなく左肩上がり（当時は気にも留めていませんでしたが、左利きだったのでしょ）だったもので、解読するのに時間がかかりました。「?????」

ギリシア語であることも知りませんでした。ん？ 定冠詞の「ο」がついているということは、中学と高校の世界史の教科書に載っていた、このイエスという人は、自分が「唯一の道、唯一の真理、唯一の命」だと断言しているのか？ もし本当にこの人が唯一の真理なら、自分では分からなくなった本当の私のことも知っているに違いない。そうでなければ、この人は大嘘つきだけど、どうせ世の中には嘘つきが多いのだから、ダメもとで当たってみるか。というわけで、イエスを知りたいというより自分を知りたいという全く自己中な動機で、マシー神父が指導する聖書の分かち合いグループや祈りの集いに参加するようになりました。それでも御言葉や信仰の先輩方との交流と分かち合いを通して、イエスは生きておられる、無条件で今の私を受け入れてくれる、真理を語るだけなく真理そのものである方である、と身をもって知るようになった。あの寝付けな

い夜から半年過ぎた翌年、一九七九年の復活の主日に、入信の秘跡である洗礼・堅信・聖体を授かりました。翌週から聖霊生活セミナーに参加するため初台教会に通い、聖霊降臨の主日に聖霊の満たしを受けました。

ケイ神父様の『私のミッション』、もう一つはマイケル神父様が最後に紹介しておられる『聖アウグスチノ作とされる聖霊に向かう祈り』（6頁参照）です。

### 霊的賜物として

この45年間、特にカトリック

### 「ミッション」の深い意味

マッケイ神父様と初めてお会

いしたのは、一九八〇年代前半、

当時ベルナルディン・シュナイ

ダー神父様やダニエル・マッコ

イ神父様が主催者となって海外

から指導者をお招きし、毎夏、

兵庫県売布と静岡県裾野の黙想

の家で開催されていた英語の黙

想会だったと記憶しています。

参加者は英語圏の司祭と男女修

道者がほとんどで、信徒も数人

まじっていました。（当時神学

生だった畠神父様と初めてお会

いしたのも売布での黙想会です

た。裾野では隣接する水泳プ

ールを使用できると事前に知ら

されていたので、昼食後の自由

時間に水着姿の神父様やシスタ

ー方に混じって泳いだり水中談

笑したりしました。まだ30代だ

ったマッケイ神父様が、いたず

「I am the way, the truth, and the life.」は、「和訳と同じだよね（当時は新約聖書の原文が

「ヨハネによる福音書」14章6節が目にとまりました。和訳は、「私は道であり、真理であり、命である。」ふーん。英訳は、

「I am the way, the truth, and the life.」は、「和訳と同じだよね（当時は新約聖書の原文が

「ヨハネによる福音書」14章6節が目にとまりました。和訳は、「私は道であり、真理であり、命である。」ふーん。英訳は、

らっ子のように別の神父様の背後にこっそり忍び寄って水をかけたりにしていたのを私は目撃しています。

今年になってマッケイ神父様のご病気と手術について知り、執り成しの祈りをする際、お名前のアルファベット表記を確認しようとしてネット検索したところ、聖コロンバン会が発行する『コロンバン・ミッシヨン・マガジン』という会報誌の最新号に、オンラインでは3月1日付けでマッケイ神父様が書かれた記事を発見しました。My Mission (私のミッシヨン＝使命・派遣)というタイトルの短い文章です。神と日本に対するマッケイ神父様の深い愛を改めて伺い知り、勝手に和訳してお送りしたこの文章を神父様はとても喜んでくださいました。私も大きな発見がありました。オンラインのオックスフォード辞典によると、missionは、『16世紀中葉(世に聖霊を遣わすことを意味する)、ラテン語の名詞「ミッシオ」、動詞「ミッテール」

から』とあるのです。さらに別の文献では、この意味で使ったのは福音を伝えるために宣教師を海外に派遣するイエズス会だった、とありました。英単語の「ミッシヨン」がより広義に「使命」という意味で用いられるようになったのは、その後のことでした。

### 聖アウグスチノ作とされる『聖霊に向かう祈り』

マイケル神父様の記事で初めてこの祈りを知りました。英語圏でこれほど知られているのであれば、日本語の定訳もあるのではないかとアウグスチノ会の方神父様に問い合わせしてみました

が、「ない」とのこと。それが私が和訳することになりました。本当に聖アウグスチノが書いたのであれば彼の著作集の中にラテン語の原文があるはず、とネット検索しまくりましたが、見つけることはできませんでした。あの『平和を求め祈り』が中世に生きたアシジの聖フランシスコの著作ではなく20世紀に入ってから知られるようになり、

聖フランシスコの霊性にふさわしいという理由も含めて様々な経緯から聖フランシスコに帰属する祈りになったように、この祈りもその霊性にふさわしいという理由で「聖アウグスチノの」という称号がついたのかもしれない

ません。いずれにせよ、私たちを御自分の神殿として住んでおられる聖霊を深く知る祈りであることに変わりはありません。ただ、コンパクトにまとめて言い足りない部分もあったので、少し注釈的な別バージョンもこちらで紹介いたします。

聖霊、私の内に呼吸してください。命を与える霊の酸素を取り込み、不要になった霊の二酸化炭素を排出してください。私の思いがすべて聖なるものであるように。

聖霊、私の内に明確な意図をもつて行動してください。私の働きも聖なるものであるように。聖霊、私の心をぐっと引き寄せてください。私が聖なるものだけを愛するように。

聖霊、私を強めてください。私がつすべての聖なるものをあらゆる敵から防衛するために。

聖霊、私をあらゆる危険と損害から守ってください。私がいつも聖なる者であるように。

アーメン、誠にそうでありますように。

### St. Augustine's Prayer to the Holy Spirit

Breathe in me, O Holy Spirit,  
that my thoughts may all be holy.  
Act in me, O Holy Spirit,  
that my work, too, may be holy.  
Draw my heart, O Holy Spirit,  
that I love but what is holy.  
Strengthen me, O Holy Spirit,  
to defend all that is holy.  
Guard me, then, O Holy Spirit,  
that I always may be holy.  
Amen.